

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02659

研究課題名(和文)日本のマルチリンガリズムの総合的研究：多文化共生につながる教育を求めて

研究課題名(英文)Comprehensive study of multilingualism in Japan: Inquiring education for making multicultural kyosei (co-existence)

研究代表者

藤田ラウンド 幸世 (Fujita-Round, Sachiyo)

国際基督教大学・教養学部・客員准教授

研究者番号：60383535

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：基礎調査の成果は、英文ではFujita-Round & Maher (2017)の共著論文、Maher (2017)の単著、Maher(2016a, 2016b)の論文があり、日本語では藤田ラウンド(2016)がある。教育実践は、宮古島市の中学校と小学校で国際理解教育の授業を行い、その子どもたちの意識変容を上述の藤田ラウンド(2016)で記述した。教育素材は、1) 宮古島の民話を提供するウェブサイト「宮古島伝承の旅(<http://miyako.ryukyu>)」と、2) ドキュメンタリー映像「みゃーくふつの未来：消えゆく声、生まれる声(約40分)」を制作した。本報告書末尾に書誌情報がある。

研究成果の概要(英文)：The theoretical findings on Multilingualism in Japan were published in English, a joint paper by Fujita-Round & Maher (2017), a book by Maher (2017), papers by Maher (2016a, 2016b), also in Japanese, a paper by Fujita-Round(2016). The Action research in the classroom was implemented at one Junior high school and elementary school in Miyakojima city as an international understanding education, as mentioned Fujita-Round (2016) has written about the pupils' self-awareness. For the educational resources for Miyako Island pupils, 1) a website of Miyakoan folk tale collection, "Miyako Island Folklore Journey: Voices from the Past Making Connections in a Globalized World" and 2) a documentary video, "The Future of Myakufutsu (Miyakoan) : Disappearing and Emerging Voices" were produced. These full references appear at the end of this final report.

研究分野：社会言語学

キーワード：マルチリンガリズム 応用言語学 日本のバイリンガリズム バイリンガル教育 異文化コミュニケーション 消滅危機言語の復興 グローバリゼーション 多文化共生

1. 研究開始当初の背景

(1) 言語の多様性と言語の力関係

21世紀現在の日本社会には、社会言語である「日本語」のみならず、1)先住民言語(アイヌ語、琉球語)、2)19世紀に日本に移住をしたオールドカマーの母語(韓国語、中国語)、3)1990年改定入国管理法に伴う労働が認められた日系人3世までを中心としたニューカマーの母語(ポルトガル語、スペイン語)、4)非漢字圏のニューカマー移民の母語(フィリピン語、ネパール語)、5)バイリンガルとしての日本手話(日本手話と日本語手話)など、言語の多様性が豊かにある(Maher, 1997; Fujita-Round & Maher, 2008)。

これらの言語話者の背景となる文化を前提に、2012-2014年度まで「多文化共生を再考する」を主題とし、科研基盤(c)研究を行った。その結果、事例を通して「多文化」が決して並列しているわけではなく、「共に」同じ社会の中で生活を営むとしても、それぞれの属する「文化」や「言語」に対して社会の価値が反映されるため、多言語を用いる個人のアイデンティティの構築は一樣ではないことが浮かび上がった。

(2) 「共通語」としての日本語と「地域言語」の、多様性の共存

日本社会の言語の多様性の中でも移民言語は東京や大阪などの都市に集中するのに対して、後述するユネスコによる消滅の危機に瀕している8つの言語は中央から離れて、日本の国境近くの周縁に存在している。筆者のこれまでの研究フィールドの新宿区のニューカマーの言語も日本社会の多様性を織りなす言語であれば、一方の沖縄県のさらに離島の宮古島の消滅危機言語の宮古語もそうである。宮古語のような現在使われている言語が2050年には消滅をするかもしれないと言われているのだが、その時に日本社会で使われる言語の多様性はいかなる言語なのか。消滅危機言語を意識するということは同時に日本社会の中の現用語の変容をも意識することである。これには、当然のことながら、日本社会内だけではなく、世界を取り巻くグローバリゼーションの影響も関わってくる。

1990年代は、日本のグローバル化として、日本国内に移動した日系人を中心とする移民流入の現象に注目が集まったが、それとは対照的に、国際社会では国際先住民年(1994~2004年)を契機として、広く先住民の持つ文化の多様性が注目されていた。2003年3月には、ユネスコの無形文化財局に新設された危機言語部門でのガイドライン作りが始まり、世界の危機言語研究者達が作成した危機言語の世界地図がインターネット上で公開された。つまり、国際社会では、「消滅危機言語」とみなすよりも、消滅危機言語を先

住民の危機的状況として結び付けて考えている。日本では共通語としての日本語は確立しているものの、地域言語あるいは少数言語を先住民や歴史の文脈に即して、多数言語話者の日本語話者側はどのような言語に対する意識をもっているのだろうか。

(3) 消滅危機言語の危機度

先にあげたインターネット上の、ユネスコの世界危機言語の地図には色別にそれぞれの危機度別に分けられている。日本国内にあると記載された8言語に関しての危機度は以下のように記されている。

【極めて深刻】 アイヌ語
【重大な危機】 八重山語・与那国語
【危険】 八丈語・奄美語・沖縄語・
国頭語(くにがみご)・宮古語

Source: Atlas of the World's Languages in Danger: <http://www.unesco.org/culture/languages-atlas/>

これを受けて文部科学省の文化庁は北海道大学、国立国語研究所、琉球大学に言語調査を委託し、その調査結果の報告書や本が近年公開されている(例えば、田窪, 2013)。フィールド言語学者による、それぞれの消滅危機言語の基礎調査が先行研究としてこの10年間ほどで充実してきている。

(4) グローバリゼーションと消滅危機言語

本研究では、日本国内のグローバリゼーションの現象を追求する社会言語学的アプローチで、研究代表者の二カ所のフィールド、1)日本国内で最も多言語話者の多いニューカマーの言語コミュニティが点在する新宿区、また、2)消滅の危機に瀕している琉球諸語の一つ、宮古島の多言語使用の調査を行い、大都市と離島という正反対の条件下にある2つのコミュニティのマルチリンガリズムを考察する。加えて、オールドカマーの言語コミュニティの生野区と北海道のアイヌのコミュニティも加えることができれば、言語の多様性のある程度の基盤ができるのではないかと考えている。

つまり、大都市の東京都の新宿区と大阪府の生野区、消滅危機言語で中央から離れている周縁地域の北海道のアイヌ語と琉球諸語の宮古語、この4点から日本のマルチリンガリズムを紐解こうという計画である。社会言語学からのコミュニティの言語使用の分析を試み、言語学の知見と社会言語学を繋ぐ試みでもある。「共通語」としての日本語と「地域言語」の多様性の共存を通して、日本のマルチリンガリズムを再考したい。

2. 研究の目的

(1) マクロとミクロの交叉

グローバリゼーションによる人・モノ・経

済の移動・変動は決して言語に無縁ではない。言語は初めから確固としてヒトに生まれついているのではなく、環境の中で身につけるプロセスがあるからである（藤田ラウンド, 2013）。したがって、言語に対する社会評価、また、親の意識や学校教育が重要であり、そのプロセスを現在、危機言語となっている宮古語の、地域方言を事例として整理する中で、「消滅危機言語」とグローバル化の関わりも浮かび上がってこよう。さらにマクロの理論だけではなく、理論と同時にミクロレベルで教育現場に還元することが本研究の目指すところである。

(2) 日本語と消滅危機言語との相対化

琉球語は琉球諸語ともいわれ、琉球王国の城があった首里を中心とした首里語を指して「琉球語」と代表させることもあるが決して一つの言語ではない（Shimoji, 2010）。琉球諸語は言語によっては現用語として 60-80 歳代を中心に未だに母語として使用されている。

本研究では宮古島市内の人口千人程度の一つの集落、久松地区をフィールドとし、学校を拠点とした調査を行う。共通語としての日本語が主流になっている学校現場でいかに危機言語への意識を高められるか、日本語が危機言語に果たした役割をも調査し、言語の多様性が「消滅」しつつある過程に焦点を当てる。

宮古島市には、30 から 40 の地域方言があるといわれ、その中では、久松のことばは、1) 独自の音韻体系を持ち、2) 久松ことばでオリジナルの曲を歌う歌手を輩出するなど、伝統的な民謡や民話だけではない言語リソースを持つ。そこでは、日本社会の中にある宮古特有の独自性としての「言語」がかっこよく、おもしろいと思える日本語と相対化が起きたときに思われるのではないか。

前科研の研究から継続して、宮古語という固有の言語を背景に持つ人が、多言語アイデンティティを肯定的に捉えることができるような社会、その構築を言語復興に重ねて探りたい。

(3) 日本語と宮古語のバイリンガル

箕浦(2003)は、アメリカからの帰国児童の研究で子どもの異文化体験に関わる要素として、現地に同化するプロセスと滞在年数とを結びつけ、また、箕浦(2014)では子どもの異文化体験の上では自尊感情を高める教育を行うことが重要であると述べる。

久松で育つ子どもが久松のことばや歴史を知らず、文化をイベント活動として理解するのではなく、「自」文化として、バイリンガルとして育つためには、何が必要か。日本語と地域言語間の関わりと自尊感情についても探求したい。

< 引用文献 >

- Fujita-Round, S. & Maher, J. C. (2008) 'Language Education Policy in Japan' in Encyclopedia of Language and Education, 2nd edition, Volume 1, NY: Springer, 393-404.
- 藤田ラウンド幸世(2013)「国際結婚家族で母語を身につけるバイリンガル」加賀美編著『多文化共生論』東京：明石書店
- Maher (1997). 'Linguistic minorities and education in Japan', in Educational Review, Vol. 49, No. 2, 115-128.
- 箕浦康子 (2003) 『子供の異文化体験、増補版』東京：新思索社
- 箕浦康子 (2014) 「子ども期の異文化体験とアイデンティティ」『多文化共生を再考する - 学際的な視点から』藤田ラウンド代表科研主催、国際基督教大学教育研究所後援二日連続シンポジウム予稿集、ICU, 2014年9月7日, https://www.youtube.com/watch?v=UyYa_lyhj8M
- Moseley, Christopher (ed.). 2010. Atlas of the World's Languages in Danger, 3rd edn. Paris, UNESCO Publishing. Online version: <http://www.unesco.org/culture/en/endangeredlanguages/atlas>
- Shimoji, M. (2010). Ryukyuan languages: an introduction. An Introduction, Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies, 1-13.
- 田窪行則編著(2013)『琉球列島の言語と文化 その記録と継承』くろしお出版

3. 研究の方法

(1) フィールドワークとアクション・リサーチ
— 言語の事例として消滅危機言語とされている宮古語の現状を把握するためには、質的研究を志し、宮古島でフィールドワーク調査を行う。それと同時に、消滅危機言語に関しては、その未来に関わる言語復興、すなわち、language revitalization も関わるがゆえに、現状を把握するだけではなく、同時進行で地元でのアクションが必要であると考えたことから、一つの「言語」と一つのフィールド、「集落」において、教育実践のアクションを働きかけ、それが子どもたちにどのように働きかけるかということ定点観測としてモニターすることにする。

文化人類学的なエスノグラフィー研究（言語の文脈理解のためのフィールドワーク調査）と教育実践（言語教育の中での自律学習や自尊感情を高めるための教育）言語と教育を横断するアクション・リサーチを想定している。

(2) 研究者のポジショニング

研究者の側も、また、学際的な研究方法と概念を「実践 (= 調査)」することを重視する。ただ単に、学校現場と集落のそれぞれの関連性(地元のマクロ的文脈)と子どもたちの育ち(地元の子ども期のミクロ的文脈)を一方向的に外から記述をするのではなく、参与観察をしながら、自らの働きかけで消滅危機言語の課題と今後の復興への伏線を探ることも行う。

(3)言語の力関係の構造

一言語とはいえ、こうした小社会と消滅危機言語の関係性を浮き彫りにすることは、この小社会からみたグローバリゼーション、またその逆のグローバリゼーションからみた小社会の構造や要因が見える可能性がある。事例を掘り下げることにより、言語の多様性の中の少数言語と思われがちな「周縁」と「中央」との力関係について、宮古島という日本社会の中の一地域というだけでなく、他の地域にも当てはまる構造があるのではないかと考えた。

(4)本研究の3つのプロジェクト

本研究は、3つのプロジェクトからなり、研究代表者がこの3つのプロジェクトの基幹となり、それぞれを研究分担者と研究協力者と協働しながら進めた。

<プロジェクト1:基礎調査>

日本のマルチリンガリズムと言語の多様性に関わる理論構築のため、それぞれ代表の藤田ラウンドと研究分担者のマーハが文献に当たり研究を進めた。

<プロジェクト2:アクション・リサーチ>

学校現場で教育実践を行い、その教育実践を受けた子どもたちの意識の変容を質問紙、作文、インタビューで調査した。

教育実践は、研究協力者として、善元幸夫(当時琉球大学兼任講師、東京学芸大学兼任講師)が国際理解教育の枠で宮古島市内の一小学校と一中学校で特別授業を3年間継続して行った。この授業のアドバイザーは研究協力者の多田孝志(目白大学人間学部教授、児童教育学科長)が担った。調査は、代表の藤田ラウンドが善元の授業がどのように子どもたちの浸透したのか、また宮古語への意識について質問紙、作文、それからフォーカスグループインタビューを行った。

授業を実施するにあたり、研究協力者の近藤崇士(宮古島市小学校教諭)と福原学(宮古島市中学校教諭)、また、授業のゲストとなったさどやませいこ(宮古島の民話採集、民話集を多数出版)らの学校現場や島民の協力関係があり、実現したものである。

<プロジェクト3:ドキュメンタリー記録>

研究協力者の服部かつゆき(映像アーティスト)との協働により、宮古語話者の言語使

用、また宮古語の意識を尋ねるインタビューなどを2015年から2017年の2年間に亘り撮影した。(ドキュメンタリー映像「みやくふつの未来:消え行く声、生まれる声」は2018年3月にほぼ完成している。)

4. 研究成果

基礎調査の論文として、英文のFujita-Round & Maher (2017)の共著論文、Maher (2017)の単著、Maher(2016a, 2016b)の論文、また、日本語では藤田ラウンド(2016)がある。

教育実践として、宮古島市の中学校、小学校で国際理解教育の授業を行い、その子どもたちの意識変容について、上述した藤田ラウンド(2016)に記述した。

教育素材として、1)宮古島の民話を提供するウェブサイト「宮古島伝承の旅(<http://miyako.ryukyu>)」と、2)ドキュメンタリー映像「みやくふつの未来:消えゆく声、生まれる声(約40分)」を制作した。この映像に関しては、宮古島の教育現場への還元、宮古語の未来の言語復興に役に立てるという観点から、このような研究をドキュメントする方法を試みたが、結果として、研究代表者と映像アーティストと打ち合わせをしながら、記録をしたものを、ドキュメンタリー映像として見せることができ、結果として、調査と研究に協力をしていただいた集落の方々にも成果を目に見える形で還元することができた。

一方で、フィールドワークとドキュメンタリー制作のために宮古島市内の2つの集落を中心に信頼関係を重視し、調査を行ったため、当初計画していた大阪やアイヌ語の地域には時間が足りなかった。今後の課題である。

さらに、計画当初は、印刷された学校現場で使用可能な副教材などを研究成果として想定していたが、これに関しては研究協力者の都合により、実現できなかった。その代わりに、別の研究協力者となってくれた、宮古島在住のさどやませいこの協働から、当初予定をしていなかった宮古島の民話を読める教育素材のためのウェブサイトを制作することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

渡辺幸倫・藤田ラウンド幸世・宣元錫・李坪鉉・裴曉蘭、多文化家庭の子育て戦略の課題、相模女子大学文化研究、Vol. 34、2016、1-26、査読無

渡辺幸倫、藤田ラウンド幸世、宣元錫、国際結婚家庭の子育て戦略、相模女子大学紀要、Vol.79、2016、9-24、査読無

[学会発表](計16件)

藤田ラウンド幸世、ドキュメンタリー映像「みゃーくふつの記憶」：社会言語学からアプローチする新たな言語復興ストラテジー、第10回琉球継承言語シンポジウム、琉球大学、沖縄県西原町、2018年3月25日

Fujita-Round, S., Bilingualism of school age children in Miyako Island in Okinawa, 第15回ヨーロッパ日本研究機構国際大会、The Universidade Nova of Lisbon, Portugal, 31st August, 2017

Maier, J.C., Language Diversity in Japan, Japanese Studies Association of Australia (招待講演)(国際学会), University of Wollongong, Australia, 28th June, 2017

藤田ラウンド幸世、「日本語」と消滅危機言語のバイリンガリズム、第27回日本国際理解教育学会、筑波大学、茨城県つくば市、2017年6月4日

藤田ラウンド幸世、バイリンガリズムからみる消滅危機言語：宮古島のフィールドワークと中学生へのインタビューから見えてきた課題、社会言語科学会、杏林大学、東京都三鷹市、2017年3月19日

Maier, J.C., Celtic language revitalization, 東京外国語大学国際日本研究センター比較日本文化部門対照日本語部門共催(招待講演)東京外国語大学、東京都府中市、2017年1月23日

Fujita-Round, S., Beyond the discourse of 'English' as an international language, Language Education in Global and Multilingual Context Research Group organized by Kaken Grant 26870599, 立教大学、東京都豊島区、2016年12月20日

Fujita-Round, S., Constructing a website to 'Rethinking Multicultural Kyosei (co-existence) Korean Society for Education for International Understanding (国際大会) 韓国ソウル市、2016年11月12日

藤田ラウンド幸世、「多文化共生を再考する」ためのウェブサイト構築：当事者参加型アクション・リサーチ実践報告、異文化コミュニケーション学会、名古屋外国語大学、愛知県日進市、2016年9月17日

Maier, J.C., Language and society in Japan, Japan Society for the Promotion of Science (JSPS) (招待講演) 東京モントレーホテル、東京都千代田区、2016年9月12日

Maier, J.C., Lingua Relicta: the decline of German as a medium of medical communication, International Association for Language for Specific Purposes (招待講演)(国際学会) 東京電気大学、東京都調布市、2016年8月20日

Fujita-Round, S. & Sun Wonsuk, Educational Strategy of Japanese-Korean couples: analysis of Japanese

intermarriage wives and mothers in Korea, 韓国国際理解教育学会(国際学会) 江原大学、韓国春川市、2015年10月31日

藤田ラウンド幸世、JSLの子どもバイリンガリズム、異文化コミュニケーション学会、桜美林大学、東京都町田市、2015年9月19日

渡辺幸倫、藤田ラウンド幸世、国際結婚家庭の子育て戦略：韓国在住の日韓カップルの語りから、日本国際教育学会、相模女子大学、神奈川県相模市、2015年9月13日

Perez=Murillo, M.D. & Fujita-Round, S., Korean and Spanish speaking diasporas in Tokyo: two case studies of children becoming bilingual, British Association for Applied Linguistics (国際大会) 3rd September, 2015

Fujita-Round, S. & Perez=Murillo, M.D., Becoming bilingual in Tokyo: two case studies of transitional maintenance programme, Sociolinguistics of Globalization (国際学会) University of Hong Kong, China, 3rd June, 2015

[図書](計5件)

Maier, J.C., Multilingualism: A Very Short Introduction, Oxford: Oxford University Press, 2017, 1-148

Fujita-Round, S. & Maier, J.C., Language policy and political issues in education in encyclopedia of language and education, 3rd edition, Volume 1, NY: Springer, 491-505

藤田ラウンド幸世、消滅危機言語コミュニティから日本の言語教育政策を観る 宮古島の経験から、桂木・マー八編著、言語復興の未来と価値、東京：三元社、2016、47-88

Maier, J.C., Liberating Babel, notes on imperialism, language and dystopia, Katsuragi & Maier (eds.) Minority Language revitalization, Tokyo: Sangensha, 2016b, 93-120

Maier, J.C., Multilingualism in the Chinese community in Japan, Li Wei (ed.) Multilingualism in the Chinese diaspora worldwide, Routledge, 2016a, 161-176

[その他]

共訳書

藤田ラウンド幸世、「第2部 深層構造に着目する系譜」「第7章記号論と構造主義」、プシュカラ・プラサド著、箕浦康子監訳、藤田ラウンド幸世他13人訳、『質的研究の理論入門』、東京：ナカニシヤ出版、2018、97-101、102-117

ホームページ

1) 多文化共生を再考する

<http://multilingually.jp>

2) 宮古島 伝承の旅

<http://miyako.ryukyu>

ドキュメンタリー映像

「みゃーくふつの未来：消えゆく声、生まれる声」(40分)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田ラウンド幸世(国際基督教大学)

研究者番号：60383535

(2) 研究分担者

ジョン C. マーハ(国際基督教大学)

研究者番号：50216256

(3) 研究連携者

なし

(4) 研究協力者

服部 かつゆき(HATTORI, Katsuyuki)(映像アーティスト)

マリア・D. ペレス=ムリリヨ
(PEREZ=MURILLO, Maria)(スペイン国コンベルテンセ大学・教育学部・教授)

善元 幸夫(YOSHIMOTO, Yukio)(琉球大学・教育学部・兼任講師)

多田孝志(TADA, Takashi)(目白大学・教授)

さどやませいこ(SADUYAMA, Seiko)(んきやん塾)

福原 学(FUKUHARA, Gaku)(沖縄県宮古島市立池間中学校・教諭)

近藤 崇士(KONDO, Takashi)(沖縄県宮古島市久松小学校・教諭)

與那覇チヨ(YONAHA, Chiyo)(久松ことば指導)

與那覇シヅ(YONAHA, Shizu)(久松ことば指導)

新里 博(ARASATO, Hiroshi)(渋谷書言大学・主任講師)

新里 信子(ARASATO, Nobuko)(渋谷書言大学・事務局長)

松谷初美(MATSUTANI, Hatsumi)(くまからかまからメールマガジン主宰)

下地イサム(SHIMOJI, Isamu)(シンガーソ

ングライター・歌手)

松原森久(MATSUBARA, Morihisa)(宮古島漁業組合・漁師)

親泊鎮子(OYADOMARI, Yasuko)(宮古島市地域包括支援センターみやこ・ケアマネージャー)

宮国修(MIYAGUNI, Osamu)(久貝自治会役員)

セリック ケナン(KENAN, Celik)(京都大学大学院博士後期課程・博士候補)

のひなひろし(NOHIRA, Hiroshi)(ぬかあ~ぬか店主・フォークシンガー)

與那城美和(YONASHIRO, Miwa)(宮古島民謡歌い手)

仲里初男(NAKAZATO, Hatsuo)(しらばりマンゴー農園経営者)

前泊博美(MADOMARI, Hiromi)(NPO法人いけま福祉支援センター理事長)

儀間利律子(GIMA, Ritsuko)(きゅーぬふから舎・池間いきいき教室コーディネーター)